



久留米市文化財調査報告書第172集

筑後国府跡

—第173次調査報告—

2001

久留米市教育委員会

序 文

筑後国府は7世紀末（今から約1,300年前）に成立した筑後国を治める役所として、現在の久留米市合川町に設置されました。国府には都から赴任してきた国司をはじめ多数の役人が勤務し、筑後国の政治・文化・交通・軍事などの拠点となっていました。

昭和36年に鏡山猛・小田富士雄両先生を中心とする九州大学考古学研究室によって、筑後国府跡の発掘調査が行われて以来、早40年が経過しました。その後、調査は本市教育委員会が受け継ぎ、今日では調査回数も173回を数えるに至ります。なかでも最大の成果として挙げられるのは、7世紀末に成立した国府が、12世紀後半までの約500年間と長期間に渡り存続することや、その間に国府が3度移転する事実を確認できたことで、全国的に見ても貴重な例とされています。

今回報告する第173回調査は、民間の共同住宅建設に伴って実施した発掘調査です。立石地区に位置する同調査地からは、奈良～平安時代の役所関連施設や室町時代の館に関連した遺構を検出しています。

このような本書が、埋蔵文化財保護の理解と普及のための一助となれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査に際してご理解とご協力をいただきました地権者の■■■■氏をはじめ、久留米市文化財専門委員・筑後国府跡発掘調査指導員の諸先生方、関係各位に対して、深くお礼申し上げます。

平成13年3月15日

久留米市教育委員会
教育長 桑野 善吾

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち久留米市教育委員会が受託事業として平成12年度に実施した筑後国府跡第173回調査の報告である。
2. 遺構図面の作成は、小澤太郎・水原道範・田中樹子・楳原初美・藤木幸子・丸山 幸・渡辺しげ子・渡邊やつ子が行い、遺構写真撮影は小澤の手による。また、遺物実測・拓本・製図は畠中和子が行った。
3. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系をもとに作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
4. 遺構の略表記は、SA－柵・塀、SB－掘立柱建物、SD－溝、SK－土坑をそれぞれ示す。
5. 調査・整理にかかわる遺跡略記号及び調査番号は以下のとおりである。

筑後国府跡第173回調査……TKH-173、200015

6. 本調査にかかわる遺物・記録類は久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
7. 本書の執筆・編集は、小澤が担当した。

本文目次

I. 緒 言	1
II. 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
III. 調査の記録	3
IV. 結 語	9

<表紙>調査区全景（北側から）

I. 緒 言

i) 調査に至る経過

第173次調査のきっかけは、平成12年7月24日付で地権者[REDACTED]氏より、久留米市合川町字立石403-1における共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前確認依頼が提出されたことによる。当該地の西へ約100mの地点には通称「立石土塁」があり、また第30・162次調査等では本来土塁に伴うと見られる東西大溝が検出されている。東へ約100mの地点では、第158次調査が実施されており、平安時代の小形掘立柱建物群が検出されている。

試掘の結果、表土下約40cmで遺構が存在するものと判断された。調査要との回答を地権者に通知し、最終的には調査の期間・面積・方法・費用負担等で合意に達した。平成12年10月30日付で地権者[REDACTED]氏と久留米市長白石勝洋との間に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同年10月31日から発掘調査を開始している。

ii) 調査体制

調査委託：

調査主体：久留米市教育委員会 教育長 [REDACTED] 桑野 善吾

調査総括：教育文化部長 山村 秀明

社会教育担当次長 芳司 定

文化財保護課長 関 知彦

課主査 堤 諭吉

事務主査 櫻井 康治

事務主査 松村 一良

庶務担当 権藤 節子

調査担当 小澤 太郎

整理担当 畠中 和子



Fig. 1 筑後国府跡の位置

現地作業：鬼塚 成利・川浪シゲ子・財木美智子・田代 俊子・高尾 春代・高橋久仁子・田中 樹子・田中レイ子・楢原 初美・橋川レイ子・半田 純香・廣田 英子・藤木 幸子・丸山 幸・森田スエノ・行武ツトミ・山下 郁子・渡邊 麻美・渡辺しげ子・渡邊やつ子

整理作業：福田 澄子

iii) 記録方法

遺構測量は、遺跡調査汎用システム「カタタ3DC」を使用した。土層図については水系メッシュ法で実測（1/10）した。全体および個別写真は、リバーサル35mmとモノクローム6×7・35mmで撮影した。

II. 遺跡の位置と周辺の遺跡

筑後国府跡は久留米市街の東部、合川町・東合川町・朝妻町・御井町に跨る東西約1km、南北約700m程の範囲に展開する。水縄山地の西端部より派生した中位段丘は、標高を徐々に下げ低位段丘（標高10～17m）を形成する。筑後国府跡が立地する低台地は、断層崖下の湧水点を起点とする小河川によって、西・

中央・東と三分割されている。筑後川に面した低台地の先端部は、水田面との比高差が3～4mもある崖となっている。西台地西側には、高良川が北流し、筑後川と合流する。7世紀後半の前身官衙を経て、7世紀末に成立した筑後国府は、12世紀後半までの約500年間に台地上を東へ三遷している。

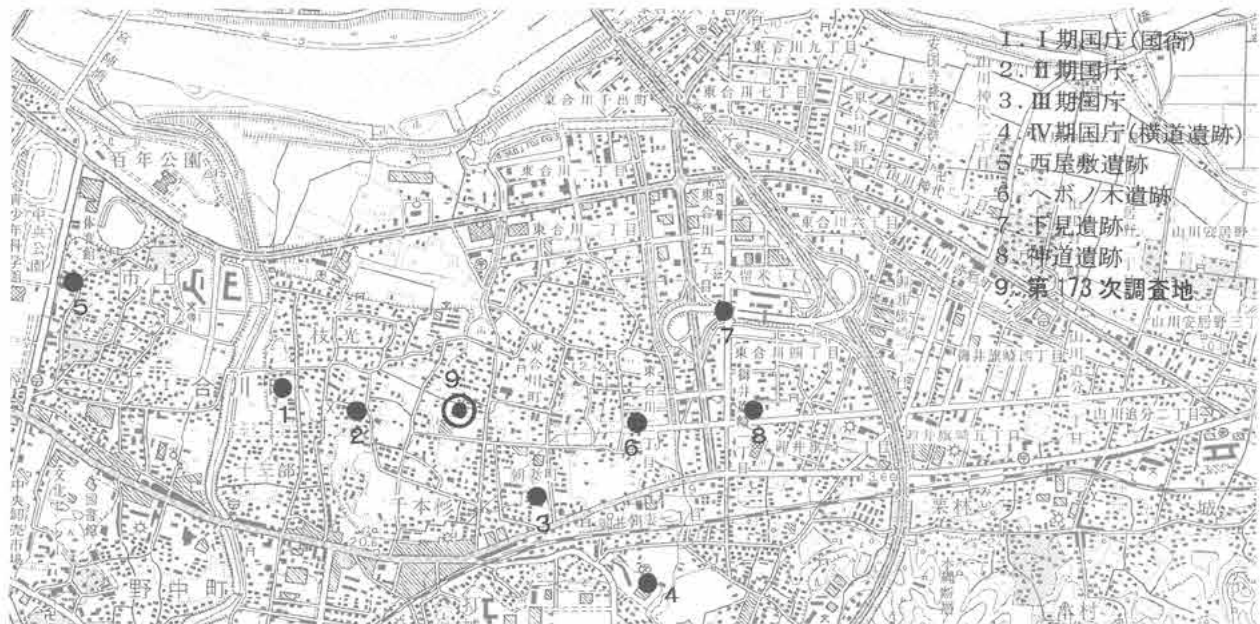


Fig. 2 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布(1/25,000)



Fig. 3 第173次調査地点の位置(1/5,000)

III. 調査の記録

i) 調査の目的と経過

当該地は、筑後国府域の中央部（立石地区）に位置し、標高 12～13m 程の低台地上に立地する。周囲は調査が進んでいない地域である。もう少し周囲に視界を広げれば、西に約 100 m の地点には通称「立石土塁」があり、また第 30・162 次調査等では土塁に伴うと見られる東西大溝が検出されている。土塁と大溝に囲繞される区画は、一町四方形の規模で中世後期の所産と考えられる。また、東へ約 100 m の地点では、第 158 次調査が実施されており、平安時代の小形掘立柱建物群が検出されている。一方、北側の吉原地区で実施されている第 34・47 次調査では、台地の北端部に当たることもあり、顕著な遺構が検出されていない。

以上からもわかるように、当地域の遺構状況の予測は困難であり、それだけに期待のかかる調査でもあった。調査区は廃土置き場等の関係から、南北に長いトレンチ状に設定することとした。トレンチは対象地東側に南北 30m、東西 5.6m とし、西側を廃土置き場とした。遺構検出段階で、掘立柱建物や土坑が確認された部分は、可能な範囲で拡張した。調査面積は 165 m² である。

調査日誌を抄録すると次のとおりである。現地調査を 10 月 31 日に開始、ユンボで表土剥ぎする。11 月 7 日先日の大雨で冠水しているために排水作業。9 日には作業員を投入し、テント設営、遺構検出を開始する。10 日より遺構掘り下げを開始する。13 日より随時トータルステーションによる測量、個別実測作業を行う。21 日に全体写真を撮影する。24 日には、器材をすべて撤収し、現地調査を終了している。

ii) 標準土層

調査区周辺は緩やかに北側に向けて傾斜している。調査区内は、かつての地下げのために平坦地となっている。植木畑であったため、攪乱を受けた部分もある。調査区北壁面での基本層位は、表土（20～50cm）、灰褐色土：耕作土（約 30cm）の順で茶褐色の遺構面（地山）に達する（Fig. 4）。

iii) 検出遺構

地下げと植木の攪乱により、特に南側で遺構の残存状況はよくない。但し土坑については、良好な状態が残るものが多く見られた。

遺構としては、掘立柱建物 1 棟、柵列 2 基、溝 7 条、土坑 8 基、ピットなどである。年代的には、奈良・平安と室町時代に跨っている。

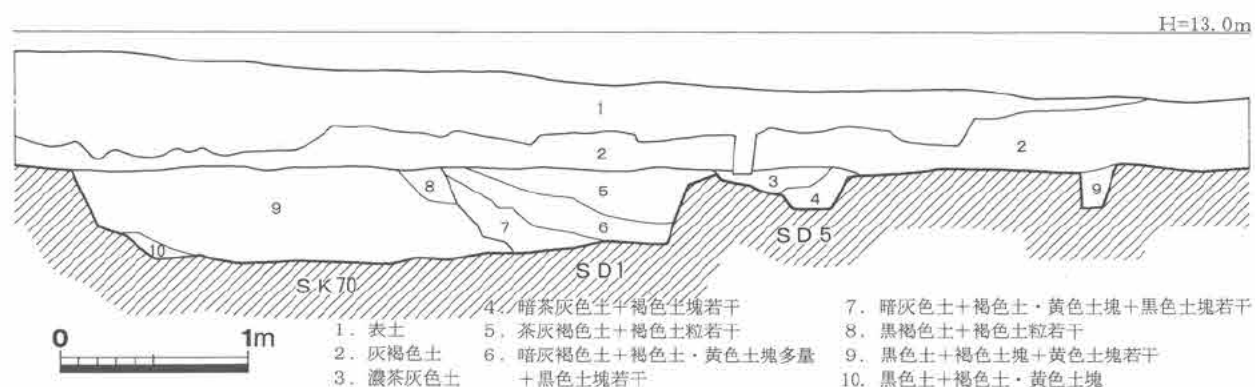


Fig. 4 調査区南区西壁面の土層 (1/40)

a. 掘立柱建物

SB20 (Fig. 6)

調査区南部で検出している。調査区外に延びるため、規模は不明である。検出分の平面形式は桁行1間、梁間1間である。柱間寸法は桁行2.88m(9.6尺)、梁間2.52m(8.2尺)を測る。柱掘形の平面形は円形で、直径50~70cmを測り、深さ約30cm、柱痕の径は約20cmである。建物の主軸方位はN-6°-Eである。出土遺物としては、掘形から須恵器、土師器、黒色土器(内黒)等が、柱痕からは土師器、黒色土器(両黒)等が見られる。

b. 柵列

SA60 (Fig. 6)

調査区南西壁際で3間分を検出した。柱痕が不明確であるので柱穴の中央で計測すれば、柱間寸法は1.75~1.9mとなる。柱掘形は、隅丸方形で一辺50~70cmの規模である。柱痕の径は、約15cmである。主軸方位はN-6°-Eである。ここでは柵列として扱ったが、調査区の西側に柱列が延びる可能性もあり、掘立柱建物になるかもしれない。柱穴から、土師器の細片が出土している。

SA75 (Fig. 6)

調査区南部で2間分を検出した。柱間は約1.5m等間である。柱穴の平面形はやや崩れた隅丸方形を成し、一辺は25~45cmで、柱痕は径約20cmである。主軸方位はS-7°-Eである。

c. 溝

SD1 (Fig. 5・6)

調査区の中央を南北方向に走行する。調査区内では、長さ約19m分を検出している。幅1~1.5m、最も深い部分で約45cmを測る。溝の断面形状は逆台形を成し溝底は平坦、底面レベルは北側に向けて緩やかに傾斜している。溝内部には、握りこぶし大の角礫や土師器の土鍋片等が混入している。切り合い関係から、SK65より後出し、SD1・2・5に先行する。

SD2 (Fig. 5・6)

調査区北部で検出した浅い東西溝である。調査区内分の規模は、長さ約5m、幅約40cm、深さ約5cmである。切り合い関係から、SD1より後出する。しかし、SD3との切り合いは不明である。

SD3 (Fig. 5・6)

調査区北部で検出した東西溝である。調査区内では長さ約5m分を検出している。溝の断面形状は緩やかなU字形で、幅約85cm、深さ約20cmを測る。出土遺物から、近世以降の所産であることがわかる。切

り合い関係から、SD1・5より後出する。なお、SD2との前後関係は不明である。

SD13 (Fig. 5・6)

調査区南西部で検出した浅い東西溝である。検出状況から、溝の底部が辛うじて残存したものと思われる。調査区内では、長さ約2.5m分を検出した。最大幅、約1m

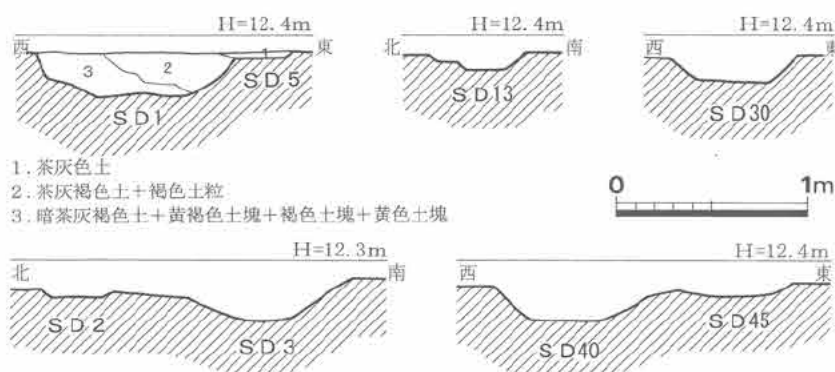


Fig. 5 溝断面 (1/40)

深さ 8 cm 程度である。

SD30 (Fig. 5・6)

調査区南部で検出した南北溝である。規模は、長さ約 2 m、幅 65 cm、深さ 12 cm を測る。位置関係や出土遺物から、SD5・45 と同一の溝で、その北延長部にあたるものと思われる。出土遺物はほとんど古瓦類である。

SD40 (Fig. 5・6)

先述した SD1 の北延長部で検出した。規模は、長さ約 4.7 m、幅約 80 cm、深さ約 20 cm である。SD1 との切り合い関係は確認できなかった。ただし、SD1 とは若干ずれて連結するため、時期差がある可能性がある。

SD45 (Fig. 5・6)

調査区南部で検出した南北溝である。長さ約 2.5 m、幅約 60 cm、深さ約 5 cm である。位置的に見て、SD5 と SD30 と連結し、同一遺構となる可能性が高い。いずれの遺構も浅いために、深い部分が残ри、結果的に断続的に検出されたのだろう。

d. 土坑

SK10 (Fig. 7)

調査区北西部で検出。調査区外に延びるため、詳細は不明だが、現状規模は南北 1.65 m、東西 80 cm、深さ約 60 cm である。出土遺物に土師器、須恵器片などがある。

SK15 (Fig. 7)

調査区北東部で検出した楕円形状を呈する土坑である。規模は長さ 1.45 m、幅 1.3 m、深さ約 20 cm である。出土遺物は少なく、土師器の細片が含まれる程度である。

SK25 (Fig. 7)

調査区南東部で検出した。平面形は円形で、規模は径約 1.3 m、深さ約 60 cm と残りはよい。

SK35 (Fig. 7)

調査区南西部で検出した。平面形は歪んだ円形で、径約 1.2~1.4 m、深さは約 50 cm である。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器片などがある。

SK55 (Fig. 8)

調査区南東部で検出した不正形の土坑である。長さ 1.6 m で、幅約 1 m、深さ約 30 cm である。あるいは 2 基の土坑が重複している可能性も残す。出土遺物に土

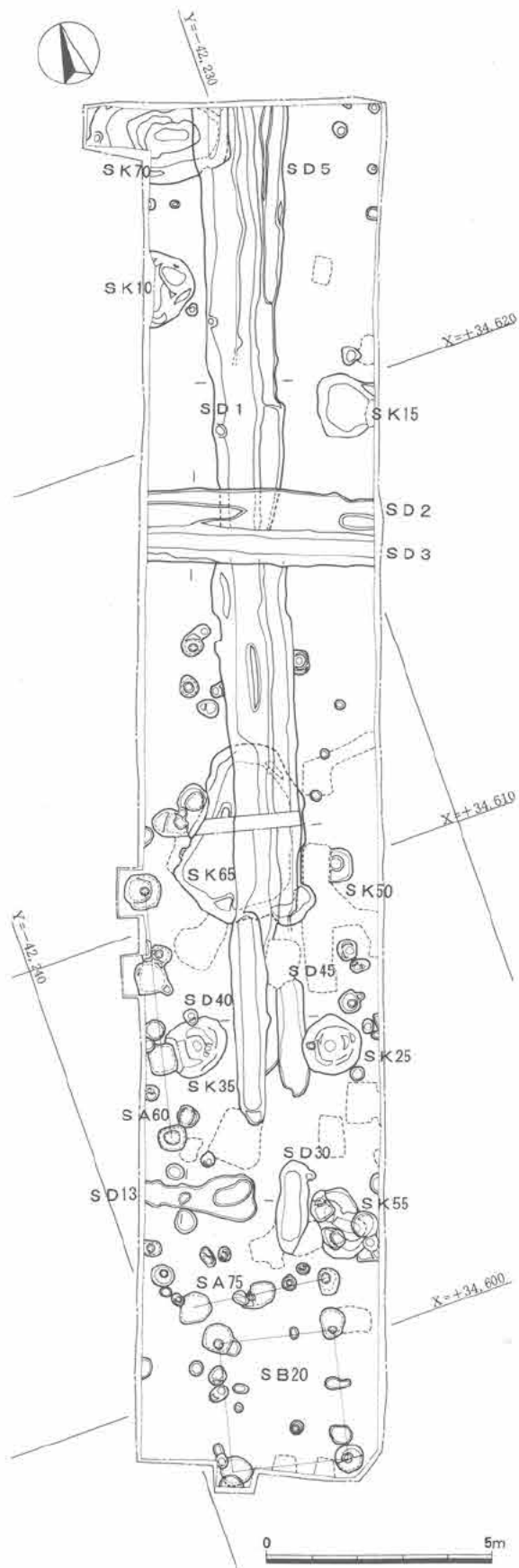


Fig. 6 調査区平面図 (1/150)

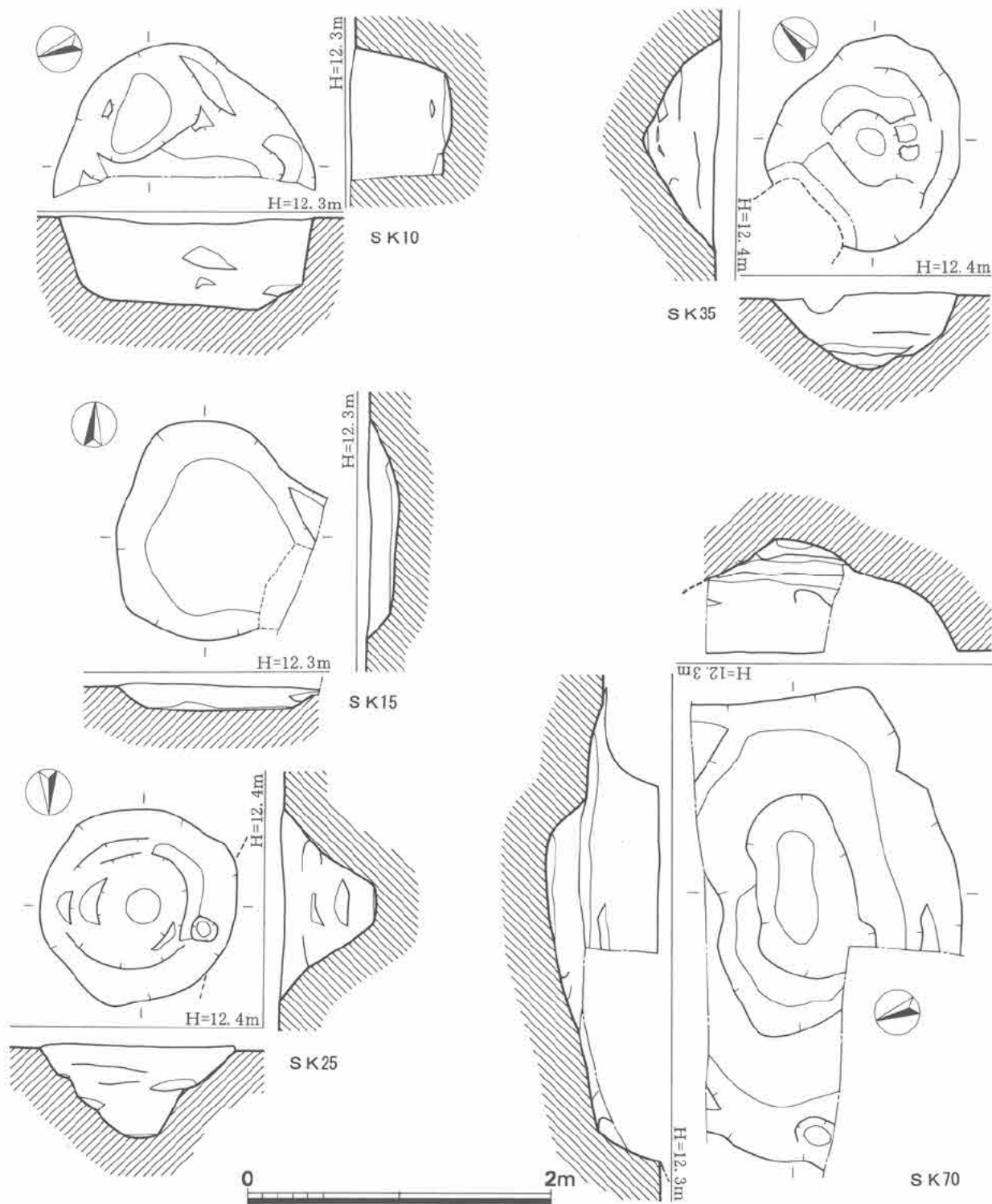


Fig. 7 土坑実測図① (1/40)

師器、黒色土器（内黒）細片がある。

SK65 (Fig. 8)

調査区中央部で検出した。平面形状は不整形で、長さ3.4～3.8m、幅2.8m、深さ70cmを測る。土層の観察から、平面が長方形を呈する2基の土坑が重複することが判明している。切り合い関係から、SD 1・5に先行する。

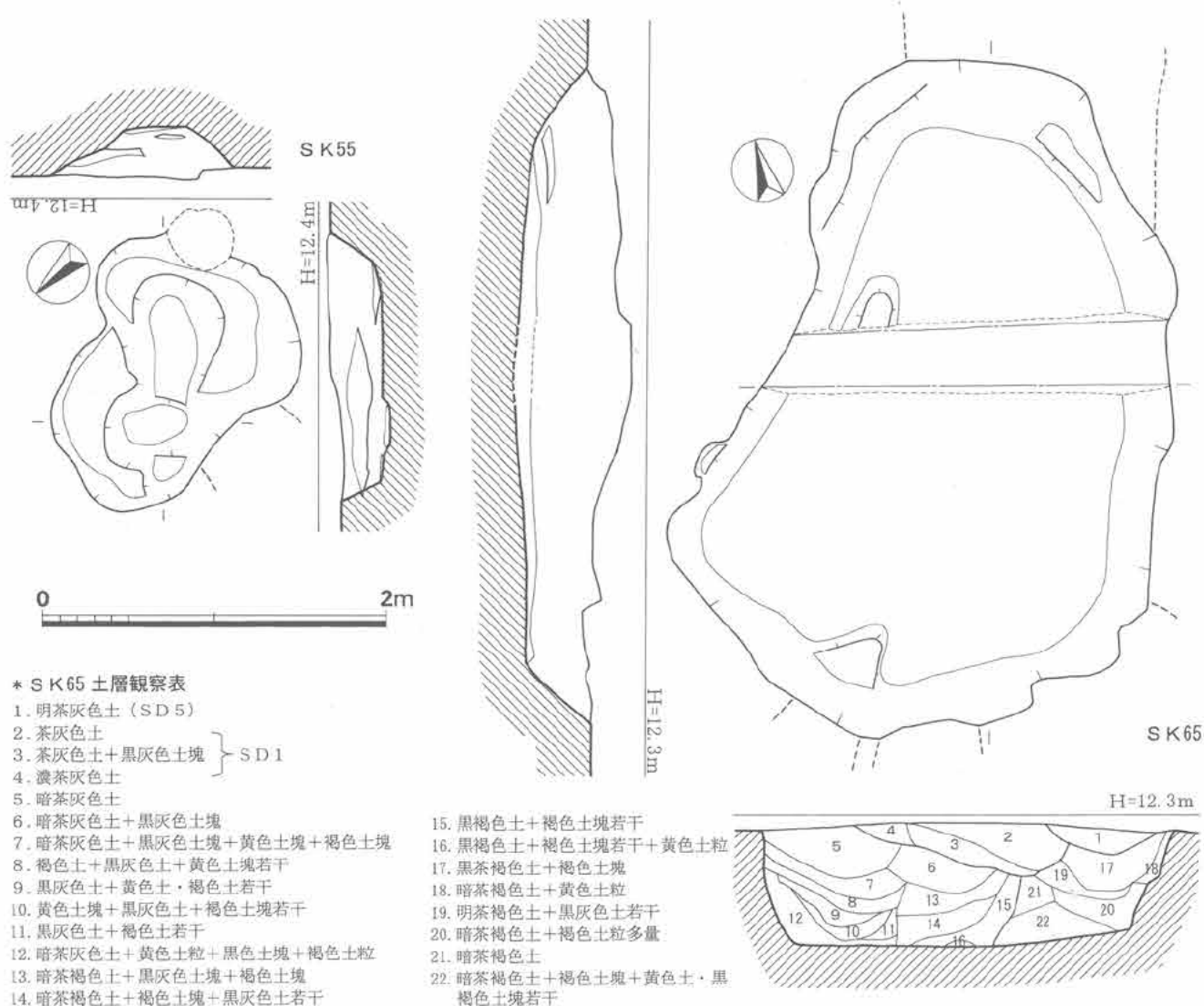


Fig. 8 土坑実測図② (1/40)

SK70 (Fig. 4・7)

調査区北西部で検出した。調査区外に延びるが、平面形は楕円形を呈するものと思われ、長軸 2.8m、短軸 1.7m以上、深さ 75cmである。切り合い関係から、SD1に先行する。

iv) 出土遺物 (Fig. 9)

1・2は、SB20-柱穴b掘形出土の黒色土器(内黒)、3は同じく柱穴c柱痕出土の黒色土器(両黒)。
4・9・13は、SD1の①層出土。4は土師器坏で糸切り底である。5～8・10・12・17は、同じく②層出土。5は土師器碗。6・7は土師器小皿、共にヘラ切り底で6には板目あり。8は土師器高坏。17は青磁の輪花碗。11・15・16・18は、SD1・5出土。15・16はそれぞれ須恵器蓋・壺、18は白磁碗。19はSD5出土の土鍋片。20・21は、SD30出土で、21は丸瓦。22はSD40、23はSD45出土の土鍋片。24～30は、SK65出土。24・25は須恵器で、後者は転用硯である。26は体部と底部の境を面取りする土師器坏、28は土師器碗の底部、29の土師器皿底部は手持ちヘラケズリ。31・32はSK25出土の須恵器。33～37は、SK70出土。33・34は須恵器蓋で、転用硯。35の土師器皿底部は手持ちヘラケズリする。37は越州窯系青磁碗の底部。38はSP34出土須恵器坏で、口縁部に煤が付着する。

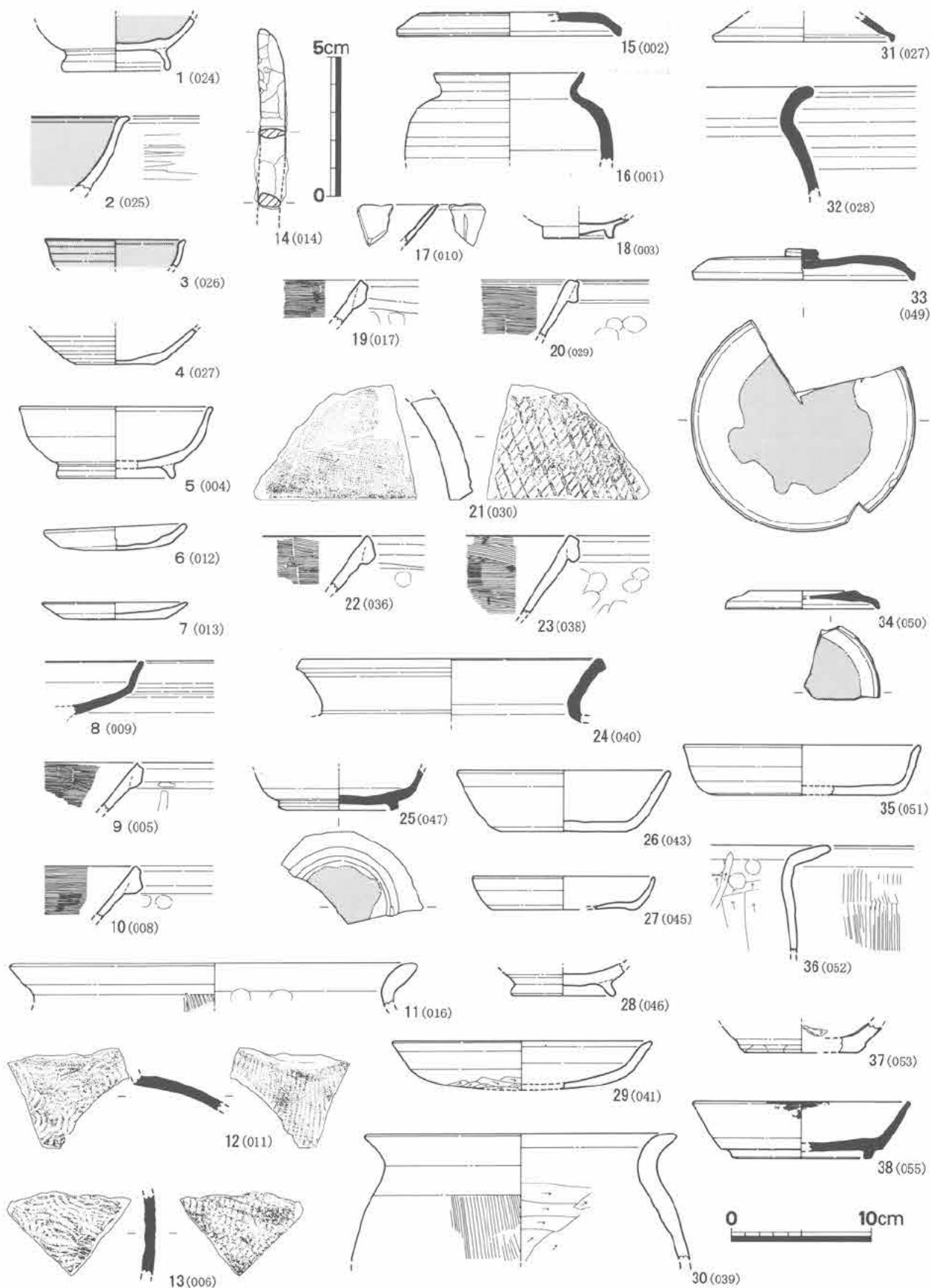


Fig. 9 出土遺物実測図 (1/4、14のみ1/2)
 ※カッコ内数字は、本市遺物登録番号の下3桁である。

iv) 結 語

SK10・15・25・35は、概ね8c代であろう。SB20、SK65・70は、8c代の遺物も混入しているものの、9c後半頃の所産と考えられる。SD1・5・30・40・45は、出土遺物から14c後半～15c前半の年代が推定できる。中世後期の溝については、「立石土塁」と主軸方位を同じくし、年代もあってくる。溝の埋没は西側から開始しており、土塁の東側にも館に関連した区画が存在したのだろう。

写真図版



(1) SA60 全景 (北から)



(2) SB20 全景 (北から)



(3) SB20-柱穴a断面 (北から)



(4) SD1・5土層 (南から)



(5) SD1・5 全景 (南から)



(6) SD30 遺物出土状況 (北から)



(7) SK25 全景 (東から)



(8) SK35 全景 (北から)



(9) SK55 全景 (北東から)



(10) SK65 全景 (東から)



(11) SK65土層 (南から)



(12) SK70 全景 (東から)

報告書抄録

ふりがな	ちくごこくふあと							
書名	筑後国府跡							
副書名	第173次調査概要報告							
巻次								
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第172集							
編著者名	小澤太郎							
編集機関	久留米市教育委員会 教育文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市条南町 15-3 Tel. 0942-30-9225 Fax. 0942-30-9718							
発行年月日	西暦 2001 (平成 13) 年 3 月 15 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード*		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
筑後国府跡 第173次調査	福岡県久留米市 合川町字立石	40203	030112	33° 18′ 42″	130° 32′ 47″	001031 ～001124	165	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第173次調査	官衙	奈良～ 平安	掘立柱建物	1棟	土師器・須恵器・ 黒色土器・白磁・ 越州窯系青磁・古 瓦類 土師器、鉄器		転用硯等も出土し、官 衙関連施設が調査地周 辺にも展開している模 様。 「立石土塁」関連施設 の東限溝と考えられる。	
	集落	室町 近代	柵列	2基				
			土坑	8基				
			ピット					
			溝	6条				
			ピット					
			溝	2条				

筑後国府跡 -第173次調査報告-

久留米市文化財調査報告書 第172集

平成13年3月15日発行

発行：久留米市教育委員会

印刷：永松印刷